

新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『マンガ視覚文化論 見る、聞く、語る』

鈴木雅雄・中田健太郎（編） | 水声社、2017、414pp.

本書は2014–2015年に行われたワークショップ「マンガ、あるいは「見る」ことの近代」の書籍化であり、同種の企画に基づいた前著『マンガを「見る」という体験』（水声社、2014年）を引き継ぐものだ。「見る」という表現でのカギ括弧の使用、そして近代というキーワードは、写真や映画などの近代技術による視覚のあり方の変容とその制度化に目配せしている。美学・美術史の分野ではオーソドックスとも言えるこの問題設定のもとで、本書は、コマやフキダシといったマンガ特有の技法の実際を具体的に取り上げながら、通常は「読む」ものと呼ばれているマンガを「見る」「聞く」「語る」とはどのような経験なのかを分析していく。学会や専門学部の設立により、マンガが学的対象としての自立を強めているなかで、視覚文化という芸術学の広汎な枠組みのなかにマンガを見事に位置づけた本書は、マンガ研究の最前線であるだけでなく、一つの到達点であるようにさえ思える。本書をガイドブックとして、手元の、あるいは見知らぬマンガに手を伸ばしてみれば、新たな視点からの主体的な、主体的と言うにはあまりにも軽やかで楽しいマンガ体験が待っていることだろう。

評／『彦根論叢』編集委員／藤岡俊博

『現代現象学 経験から始める哲学入門』

植村玄輝・八重樫徹・吉川孝（編） | 新曜社 2017、viii, 314pp.

現象学の創始者エドムント・フッサールが、記念碑的著作である『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』（第1巻）を刊行したのは1913年である。ふだん『イデーネ』と呼ばれ習わされるこの書物が切り開いた領野は、分析哲学、マルクス主義哲学、構造主義等々の多様な思想の潮流が生まれたこの100年を経てもなお、刊行当初のみずみずしさをまったく失っていない。本書のような入門書が、今日の現象学研究的現場を担っている若い研究者たちによって編まれ、著されたことがその証左である。専門用語である「志向性」を除くと、目次に並ぶのは「存在」「価値」「芸術」「社会」「人生」といったなじみのある単語であり、誰もが経験するこうした一般的な事柄を思考するための指針が、まさに自分自身の「経験」から出発して哲学するという現象学の立場の表明となって与えられる。その意味で本書は、現代哲学の一分野としての現象学の入門書の体裁をとりながら、読者を哲学そのものの営みへと誘うとともに、平明な記述と丁寧な注を通じて、読者の哲学を励ます伴走者となっている。哲学に関心をもつひとへの格好のガイドとして、長く読まれていく本となるだろう。

評／『彦根論叢』編集委員／藤岡俊博

